

ピータがいた時間

白石 恵理

海外の大学院で学び直そうと決めた時はすでに三〇歳を少し過ぎていた。大学を卒業以来、会社勤めの期間を合わせると一〇年くらいライター業を続けてきて、そろそろ自分の専門テーマと呼べるものを持ちたいと考えようになった。過去にニューヨークで一年余りを遊び暮らした苦い経験から、今度はしっかり脇目も振らず「勉強」しようと思に決めた。美術史を選んだのに深い理由はない。展覧会めぐりが好きだった程度である。強いて言えば、大学時代に近代文学のゼミで講読した野間宏の『暗い絵』という小説が、ずっと頭の片隅に引っ掛かっていた。テキストそのものよりも、モチーフとなっているブリュゲルの絵が気になって仕方なかった。そうだ、ブリュゲルの作品を含む西洋美術史の基礎をヨーロッパで学ぼう。せっかくならブリティッシュ・イングリッシュにも触れよう。思い立ってすぐ、英国で美術史に力を入れているという大学院のいくつかに願書を送り、入学許可の返事をもらったのが、東部のノリッジにあるイースト・アングリア大学（以下、UEA）だった。

九〇年代後半の、とある七月、留学先には日本人学生が山ほどいた。当時の社会情勢を反映してか、多くが開発学（Development Studies）や国際関係学（International Relations）、ジェンダー学（Gender Studies）等を大学院で学ぶことをめざしていた。美術史専攻志望者もぼちぼちいた。秋から始まるディプロマ・コース（修士課程進学前の一年制準備コース）入学を前

に、われわれ留学生はまず、レベル別の語学研修を義務づけられ、同時にキャンパス内の寮生活が始まった。

一般の学生が夏休みで里帰りしている期間中、寮で生活していたのは日本のほか、ロシア、イタリア、スイス、トルコ、キプロスなど諸外国からの新入生のみで、ほとんどが学部を卒業したての二〇代初めの人たちだった。ディプロマのあと修士号を取った二年後には本国に帰ってどこかの企業に就職するか、英国で働く。そんな強い意思を持って、誰もが始めから猛烈に語学の勉強に励んでいた。それに比べ、わたしはというと、のんきなものだった。仕事を離れて勉強だけしていればよいという「学生」の時間に久々に舞い戻り、しばらく足が地面から数センチ浮かんでいるような気分だった。当時の日記を読み返すと、寮に到着した週の金曜日、「読書や朝寝をしてリラックス」とある。ほかに書いてあることといえば、「ティッシュの箱にある MANSIZE とは何か？日本のものと同サイズなのに「男もの」とはこれいかに？」だの、「大人が大真面目に『Lovely!』と口にする心がなごむ。気に入った」だの。「自炊用の鍋と食器をそろえるのに時間を費やした」あとは、「Sainsbury's という大型スーパーの品そろえはすごい」とか、「アメリカでは、四個セットで販売しているヨーグルトや卵を一個単位で買うこともできたのに、ここでは、切り離して買ってはいけないということを学んだ」云々。

ロンドンから特急電車に乗ると約二時間で到着するノリッジは、落ち着いた、されど活気のある美しい街である。一八世紀までは織物産業で栄え、ロンドンに次ぐ英国第二の都市だったという。大聖堂を中心とした市街地には、現在は博物館となっている城と壁と石畳が残り、一一世紀から一千年以上続くという市場も健在だ。その中心部からバスで五分ほどの距離に、UEA の広大なキャンパスはある。敷地内には銀行 A T M や郵便局やクリニック、周辺に

は小さな食料雑貨店までとりあえずそろっていて、街へ出ずとも大抵の用は足りる。逆に言えば、キャンパスにこもっている限り、一般住民とのふれあいは皆無である。ノリッジ到着から一週間目で早くも寮生活が窮屈でたまらなくなつたわたしは、秋から街なかへ引越す計画を立てた。

学内の住居あつせん所で見つけた貼紙をたよりに電話を入れ、その足で向かつた先は、市街中心部のバス停から歩いて五分ほどの一角にあつた。テラスド・ハウスと呼ばれる、長屋風に壁を共有して立ち並ぶレンガ造りの一軒で、可愛らしい二階家だつた。

白髪で細身の婦人が、笑顔で迎えてくれた。あとで七〇歳と知つたが、信じられないほど若々しい。水色に白い小花模様がプリントされたローラ・アシュレイ風のワンピースが、瞳の色によく映えていた。ピンクや赤やグリーンの大ぶりの花柄クッションに、それとお揃いのソファカバーに、レースのカーテンに、立てて飾られた陶製のお皿に、銀食器。それこそ、*"Lovely!"* と声に出してしまいそうなほど、ロマンチックな室内に招き入れられ、緊張する。が、彼女は最初から、茶目っ気たっぷりだつた。「コーヒーか冷たい飲み物はいかが？ ティーとは言わないでね。わたしの淹れるお茶はひどくまずいの」。正直で率直な人柄はその後の会話の端々にも感じられ、電話代以外の何もかもひくるめて部屋代週四〇ポンド（当時六五〇〇円程）と聞いた瞬間には、間借りを即決していた。けれど、訪ねた一軒目であまりにもとんとん拍子に話が進み過ぎて、いささか不安にもなつた。

「あのう、わたしは外国人で、日本人ですが、構いませんか？」そう聞くと、「あらっ」と微笑んで意外な答えが返ってきた。「わたしも外国人ですが、いいですか？ イングランド人じゃなくてアイルランド人ですけど」。

彼女の名前はピータといった。家族も友人も誰もがそう呼んでいた。本当はペトロニーラという少し長い名で、アイルランド特有のマックが付く苗字の人だった。ピータとの二人暮らしは、快適だった。引っ越した当日に、二階にあるベッドとデスクとチェストだけが置かれた、やはりラブラーな花柄の一部屋をあてがわれ、キッチンやバスの使い方を伝授され、英国式のホット・ボトル（湯たんぼ）を一つ持たされた以外、余計な干渉は一切なかった。わたしもその流儀に倣い、なるべく彼女の日常のリズムを乱さないよう気を付けた。と言って、会話がなかったわけではない。それぞれのお茶の時間や朝夕食の準備などで顔を合わせるたびに、キッチンでいろいろな話をした。友人との電話中にわたしの口から漏れる米語をあとで英語に矯正されたり、発音をさりげなく注意されたりすることもあった。

親しくなるにつれ、少しずつ自分の生涯について語ってくれるようになった。北アイルランドのベルファスト出身で、実家は商店を営んでいたこと。お父さんは、アイルランド独立運動を指揮して二〇年代に暗殺されたマイケル・コリンズの友人だったこと。ピータ自身は一〇代の頃にロンドンに移り住み、長じて結婚した相手は、某有名石鹸会社の社長だったこと。その後離婚することになり、三人の子どもを抱えてどこに行こうと途方に暮れた時、エイヤツと地図にピンを刺した先がたまたまノリッジだったこと。以来、市内では最も大きな病院で、院長秘書として定年まで働きながら子どもたちを育て上げたという。ピータは、ノリッジに住むアイルランド出身者で結成した「アイルランド人会（Irish Society）」の元会長でもあった。

家には、いまは四〇〜三〇代となったピータの子どもたちが幼い孫たちを連れてよく遊びに来ていた。背が高くてハンサムな長男は消防署に勤めていて、阪神・淡路大震災の時にはレスキュー隊の一員として神戸に出動した経験を持つ。ほかに、アイルランド人会の人びとや、

地元の老人クラブの仲間など、ピータと同世代の友だちがひっきりなしに訪れては、シェリーグラスを片手におしゃべりに興じていた。(ちなみにピータは意外と酒好きで、夕食にはギネスビール一缶をお伴にしていることが多かった。)

忘れられないエピソードがある。ある朝、初めて見る年配のカップルがダイニングに腰かけ、ピータと語らっていた。近づくとも、男性のほうの表情が少し強張った(ように感じた)。UEAで学んでいると自己紹介したところ、キャンパスへ行く途中に自分たちの家があると教えてくれた。わたしは簡単に挨拶を交わしてすぐに二階へ戻った。

二人が帰ったあとでキッチンに入ると、食器を洗っていたピータが話しかけてきた。「さっきの男性のアイバンがね、あなたに一つ言いたいことがあったそうなんだけど、気分を悪くさせるかもしれないから言わなかったっていうの。それで、わたしが何？って聞いたらね、昔、四〇年代に、日本の捕虜収容所に入っていた時、ひどい仕打ちどころか、日本人にとっても親切にしてもらったということを伝えたかったって。本当はあなたと握手がしたかったって」。

そして、こう続けた。「この国でもし誰かに、日本人ということで嫌な顔をされることがあったら、アイバンのような人もいるということを思い出してね」。

エリザベス女王を訪問した日本の天皇の車列に向かって、数百人も元捕虜らが一斉に背中を向けて抗議の意を示した、と現地で報じられたのは、その翌々年のことだった。

わたしが沈みがちな時、ピータはよく“Are you lonely?”と声をかけてくれた。「もっと何かしてあげられるといいんだけど、わたしじゃ限りがあるものね。年齢が違いすぎるから」という言葉を即座に打消し、悩み事を相談したものだ。話を聞き終わると、“This is a life, isn't it?”(これが人生よね)と必ず言い添えるのが、彼女の癖だった。そのように誰に対しても平

等に思いやる反面、本人自身は他人に甘えることを好しとしなかった。彼女が転倒して、片腕と片脚を続けざまに骨折したことがある。二階の寝室から階段をずるずると這い降りる姿を見ていられず、手助けしようとした途端、びっくりするほど強い調子で拒まれた。ああ、この人はそうやって生きてきたんだなあと思った。テレビドラマでも小説でも、血なまぐさいサスペンスとミステリーが大好きで、わたしが部屋にいるか確認したい時には、ドアの向こうで「クックー」とカッコウのような鳴きまねをした。

下宿生活は一年で終了を迎えた。西洋からアジアの美術に関心が移ったわたしが、転学のためロンドンに引っ越すこととなり、それをきっかけにピータも自宅を引き払い、郊外にある次女の家の離れに移り住むことになった。その後も二度ほど会いに行き、クリスマスなどのたびに一〇年以上、手紙のやりとりは続いた。最後に手紙をもらったのは、彼女がかつて勤めていた病院のホスピス病棟からだ。ぶるぶるとした読みづらい文字で、自分以外の家族の近況が記されていた。

わたしがあの時の勉強の結果、いまこうして研究者の列の端っこにぶらさがっていることを知ったら、彼女は「これも人生ね」と、笑うだろうか。

(国際日本文化研究センター助教)